41	Polnoi Frantsuzskoi i Rossiikoi Leksikon		
	A O-15	1798	I. Tashishchevym編
	ゴロウニンが、文化8年(1811)に国後（くなしり）島で捕らえられた時に所持していた仏露辞典。		

◆ 当時ゴロウニンが所持していたタシーチェフ(Tashishchevym）の辞典は、上下2冊本であった。当館が所蔵しているのは下巻(L－Z）である。上巻(A－K）は一橋大学古典資料センターに現存する。

本書は、幽閉中のゴロウニンが日本人たちにロシア語を教えた際に用いられたようである。『日本俘虜実記』（講談社学術文庫）には次のような記述がある（下巻 P209－210)。「ロシアから日本に送った文書のうちには、あまり厳密に文法を守っていないのがあった。…（略）…日本人がロシアの文書を翻訳するとき、我われが彼らのために作ってやった辞典と引き比べ、我われが欺いているのではないかと疑って、…（略）…どちらが正しいか知りたがるので、タシチェフの辞典を引いてこの言葉を探して見せてやり、我われが正しいことを示した」。

ゴロウニンは、釈放時にこの辞書を幕府に献じ、蕃書調所の蔵書となった。

◆ 表紙は茶色の革装。22×14cm、左右2段組全839 ページ（厚さは約75mm)。「駿府学校」の印記をもつ。ゴロウニンによると思われる単語等の書き込みが、表紙見返し、裏表紙見返し等に多数ある。また、表紙見返しには次のような和紙の付箋がある。

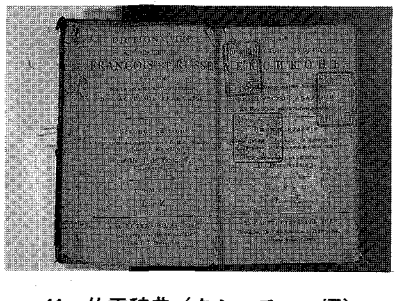
「一番甲　魯辞　魯西亜辞書　下」(原文は縦書き）

＊複製本、マイクロフィルムあり。

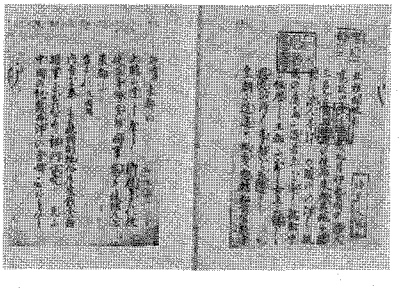
42	北槎聞略（ほくさぶんりゃく）（影印本）		
	290.9-150		大黒屋光太夫口述　桂川甫周編
	伊勢の船頭である大黒屋光太夫が漂流してロシアに至り、帰国するまでの顛末を桂川甫周が聞き取り、編集したもの。		

◆ 大黒屋光太夫(1751－1828）ら一行は天明2年(1782)、江戸への航海中に遭難し、様々な経過をたどってロシアに至った。寛政4年(1792)、遣日使節ラックスマンに伴われて帰国した光太夫は、幕府の詳細な事情聴取に応じた。当時将軍侍医であった桂川甫周(1751－1809）はそれを書きとめ、『北槎聞略』としてまとめた。寛政6年(1794）成立。光太夫の明晰な頭脳と甫周の学者としての高い資質とが合体して成った、すぐれたロシア事情の紹介書である。

＜参考資料＞　「『魯語』細見」(『明治大学教養論集』第227号　所収）(Z05-メ3-6)
『北槎聞略』(現代語訳）(290.9-149)



41　仏露辞典（タシーチェフ編）



42　北槎聞略（影印本）